滋賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学・教育科学
No. 45　pp. 37-46, 1995

タイ米ネズミ混入流言の理論構造

早　川　洋　行

Rumors of Rats in Thai Rice

Hiroyuki HAYAKAWA

This paper is a study on "rumors of rats in Thai rice" in Japan. These rumors circulated in Japan in March, 1994. I have published two papers on theories of modern rumors. This paper is based on those theories. In this paper I discuss the conditions and socio-psychological background in which the rumors occurred, what the functions of the rumors were and the relation between the rumors and the modern journalism in Japan.

I pointed out that there were three conditions (objective, subjective and social) at that time which persuaded the people that the rumors were fact. There rumors were urban rumors, rumors people made up to confirm their In-group, and to develop and express an ideology. Also discussed is the fact that the rumors were cultivated by sensationalism in the mass media.

1　流言の発生

(1)　はじめに

従来、流言とはパーソナル・コミュニケーションであり、かつオーラル・コミュニケーションであると考えられて来た。しかし、この規定を厳密に適用すると現代社会に生起する流言の多くをとらえきれなくなっている。

近年、さまざまな噂話を集めた本が何種類も出版されたり雑誌の特集が組まれたりしているが、こうした活字メディア、そしてテレビやラジオといった映像・音響メディアは、噂を媒介して伝えている。また数年前、パソコン通信を通じて噂が広まるというストーリーの小説（いとうせいこう『ノーライフ・キング』）が話題になったが、実際、パソコン通信が、噂を伝える機能を有していることは事実である(1)。

実際の事例では、1987年の「バディ君流言」は、電文や手紙で伝わったし、1989年の「当たり屋流言」は、ワープロ文書で伝わった(2)。

筆者は以前２度にわたり、こうした現代社会における流言を考えるためには、流言を「コミュニケーションの連鎖の中で、短期間に大量に発生したほぼ同一内容の言説」として解すべきことを主張し、そうとらえた際の流言の分析枠組について一定の提言を行った(3)。この論文は基本的にはこの定義、分析枠組に準拠しつつ、最近起きた特定の流言事件をとりあげ、前著では触れなかった流言の機能やジャーナリズムとの関係をも視野に入れて、現代社会における流言の社会学的意味を解明しようとしたものである。

以下ではこの了解の下に、1994年３月に発生

した「タイ米にネズミが入っていた」という言説が広まった事件を分析する[4]。この事例を通して、現代社会における流言の発生条件、その社会心理的背景、潜在的機能、そして現代日本のジャーナリズムとの関係について考えてみたい。

(2) 経過

2月27日、日本共産党の機関紙『赤旗』は次のように報じた。「緊急輸入した主食用のコメが、カルフォルニア米に続いて、中国産米、タイ産米も店頭に並び、3月からは外国産米の本格的な販売が始まります。早くもカビやネズミなど異物の混入、異臭などが問題になり食糧庁では、回収を指示しています」

この記事は、「輸入米にカビや異物これだけ(最近食糧事務所などで発見された主なもの)」という表を掲げ、タイ米から福岡で、「ネズミの死骸、昆虫の死骸、動物の骨、たばこの吸い殻、ビールの栓、針金、小石など」が、また大阪では、「針金、小石、クギ、たばこの吸い殻」が発見されたと伝えた。さらにその右下に配置された別の記事では、「炊いた外米黒く変色」という見出しで、ブレンド米を炊いたところ、黒く変色した粒があったと報じ、「近所の知人に見せると『ネズミのふんではないか?』と一見、見間違えたほどです。色は真っ黒から黒っぽい褐色の粒も混じっていました。近所の主婦らは、『3月から輸入米が大量に出回るという矢先、大変不安です。安心しておいしく食べられるおコメがほしい』と話しています」と伝えた。

これが「タイ米ネズミ混入流言」の最初の情報であった。これらの記事では、必ずしも明確にはされていないものの、種々の異物が「発見」されたのは、主食用米の中からであると読める。まずそのことを確認しておきたい。

28日、この件に関して共産党の高崎裕子議員が参議院決算委員会で質問する[5]。国会の会議録によれば、議員は次のように質問している。少し長くなるが厳密さを確保するため引用することにしよう。

「私は、大臣にぜひお尋ねしたいのは、食糧庁が現在把握し報告を受けているものだけで、今後も同様にでてくるという可能性があるわけですが、カビなど被害粒については一応回収され、また回収の見込みということなんですけれども、そのほかに異物もかなり発見されております。これについてはチェックもされていないし回収もされていないということです。/私、手元にもっておりますけれども、(資料を示す)これは主食用のタイ米なんですけれども、大阪のある精米工場で最初の粗選機というものから出た異物なんですけれども、紙、それからこれは明らかにタイのたばこの吸い殻、ゴキブリもあります。ひも、木片、チョーク、こういうものが出てきております。それから、これも大阪の精米工場で石抜き機から出た、これは真ん中あたりの工程なんですが、これだけの石ですよ。そして、ここに3センチ近いくぎがいっぱい入っております。針金、小石、くぎ、これが発見されているわけです。こういう大量の異物が大阪から出ている。/それから福岡、これは博多港から出てきて、私の手元にあるんですけれども、まずこれはタイ米なんですが、カビが生えてこういうふうに固まっているもの、それから色のついた赤いお米だとかいろいろなものがまざっているものがこういうふうにあります。それからこれは、もう本当に私驚くんですけれども、これもタイのたばこの吸い殻がいっぱいあり、それからこれはケンタッキーフライドチキン、鳥の骨です。それからあと針金、小石も入っております。私ここにはとても持ってこれなかったんですけれども、実は手元に持っております。これと同じように出てきたのが、写真でお示ししますけれども、ネズミの死骸なんです。これまでが発見されているということで、大臣、こんなものまでが含まれているという点で、もう日本ではとても考えられないことなんですね。」(傍線は筆者)

この会議録を読むと、発見されたものがより詳細に示されていることを除いても、『赤旗』の記事との食い違いに気付く。というのは『赤旗』の記事では、「ネズミなど異物の混入」は食糧庁によって発見され回収を指示されていることになっているが、高崎議員は「チェックもされていないし回収もされていない」と述べている点である。もし高崎議員の言説が事実だとすれば、『赤旗』の記事はいささか不安を煽る内容であ

ったと言わざるを得ない。また、この高崎議員の質問でも明示的ではないが主食用米にネズミが混入していたとと受け取れること、そして議員は、「日本ではとても考えられない」と述べていることに注意したい。

この質問に対して、政府側はどう答えたのであろうか。会議録によれば、上野食糧庁長官は事実をあっさり認めて次のように述べている。「外国からの輸入米の中に、今お話がございましたような各種の異物が入っているというのはそのとおりでございまして、私どももそういうものが流通過程に乗らないように、あるいは最終の精米としての製品の中には入らないように十分な注意をして対応をしているところでございます」また畑農水相も、事実を否定するのではなく、「要は国民の皆様方の口に入る」ことのないようにすることが大事だと返答している。

この質問と答弁の内容は、ＮＨＫが当日の「ニュース９」で報じたため、全国に広まることになった。

３月１日、『毎日新聞』は「タイ米の一部に異物」という見出しで、前日の参院決算委員会において「ネズミやゴキブリの死体」が緊急輸入された米に混入していたことが明らかになったと伝えた。ただし、この記事では福岡の製粉工場で加工用米から「ネズミの死体、たばこの吸い殻、鳥の骨、輪ゴムなど」が、大阪の精米工場で主食用米から「ゴキブリの死体や釘、チョーク、針金」が出てきた、となっている。ネズミは主食用米から加工用米へ移動したのである。ちなみに『読売新聞』と『朝日新聞』は、この時点ではこの件について全く報じていない。テレビ番組では、筆者が確認できた限りでは、テレビ朝日のワイドショー「こんにちは２時」が報じている。

２日、『読売新聞』は初めてこの「事件」を報じ、「畑英次郎農水相は１日の記者会見で『いつ、どこでそうした事実があったのか』と全面否定」したと伝えた。一方、これに対抗する形で同日の『赤旗』は、ネズミ混入は「事実」とネズミの死骸の写真付きで報道するとともに「福岡県内の製粉工場の労働者」が発見したものだと報じた。『赤旗』は、この段階で間接的ではあるが、ネズミは加工用米から発見されたことを認めたことになる。

雑誌では、３月７日発売の『週刊現代』がネズミの写真付きで報道、主食用と受け取られる表現も使う[6]。３月８日発売の『ＦＬＡＳＨ』は、加工用米と明記して写真付きで報道[7]。３月10日発売の『週刊文春』は、主食用・加工用区別せず、編集（もりつけ）した写真付きで報道[8]、３月15日発売の『週刊読売』は、スーパーに行列する人の話として報道している[9]。

18日、食糧庁はネズミの混入について調査したが事実を確認できなかったと発表[10]。これに対して高崎議員は記者会見して発見者名を公表する[11]。

このころになると、新聞の論調も変わり、この日の『毎日新聞』は、記事の中で「国産の検査米にもネズミが入っていることはある」と書いた。21日、『ＡＥＲＡ』は「農家でたくわえているコメでも、夏になると、ムシがわいたり、ネズミのフンが混じったりする」と指摘[12]。31日、『中日新聞』は、そもそもネズミが米に混入していたことが異常なことなのか、という問題とともに、ネズミが混入していたという事実そのものにも疑問をなげかけた。その理由は第１に、米袋の中にネズミが入っていたら船積みの圧力でぺしゃんこになるし、周囲の米も汚れるはずである。しかし、公表されたネズミはきれいなミイラで、米も汚れていないのはおかしい、第２に、ネズミやゴキブリは船倉にはつきものであり、輸送中に外から寄り付いたのではタイ米の責任ではない、というものである。同じく４月４日発売の『ＡＥＲＡ』も、同様な点を指摘し、もしネズミ混入が事実であるならば、日本で混入した可能性を否定できない、とした[13]。

以上が事件の概略である。筆者はこの話を複数の友人知人から３月上旬に聞いたと記憶している。また川上善郎らが３月下旬に行った調査によれば、「輸入米にカビやネズミのフンが入っていて不衛生だ」という話を他人から聞かされたり自分から話した人は、89.2%に上っている[14]。「タイ米にネズミが入っていた」という言説は、マスメディアの連鎖ばかりでなく、パーソナルなコミュニケーション・ルートでも広まっていたことは疑い得ない。

しかし、既に見て来たように、この言説が真

実であったのかどうかはかなり怪しい。もちろん、デマであったと断定することはできないが、少なくとも以下の3点は確認されるべきだろう[15]。①主食用米にネズミが混入していたという事実はなかった。②製粉工場の労働者が「発見」したとされるが、行政機関はこのことを確認してはいない。③このニュース・ソースはひとつであり、発見されたとされるネズミは1匹であった。

以下では、この事件が起きた背景とそれが提起した諸問題について具体的に論じていくことにする。

2 流言の背景

(1) 流言の性格

流言を生み出す社会心理には「不安」と「飽き」がある[16]。そして、不安を背景にした流言は、解決流言になりやすく、飽きを背景にした流言は解釈流言になりやすい。もちろん、解決には解釈が必要であるから、解釈流言は解決流言の上位概念として考えられる（図1参照）。

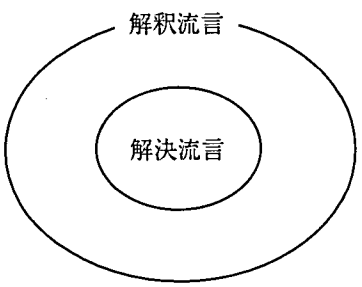

図1　解釈流言と解決流言

今回の事件における流言は、「タイ米を避けよ」という命令を含む解決流言であった。ここから、この流言を生み出した心理としては、「飽き」よりもむしろタイ米の安全性に対する「不安」がはたらいたと考えるべきである[17]。

こうした命令は、言うまでもなく自らの安全を守ろうとするものである。ただし、不安は必ずしもこうすれば身を守れる、というような言説を生み出しはしない。ときには、他者を否定することで不安を静めようとすることもある。この点は以前書いたので詳しくは繰り返さないが、不安を背景にした流言は、自己肯定的な言説としてあらわれるもの、他者肯定的言説としてあらわれるもの、他者否定的言説としてあらわれるもの、自己否定的言説としてあらわれるものの4種類がある[18]。今回の場合は、このうちの第1のパターンであると言えよう。

この類型において、注意すべきなのは、それは第3の他者否定的言説と紙一重の違いしかないということである。同様な流言に1990年に関東地域一帯で発生した「外国人レイプ流言」や1984年長野県で起きた「プールで性病流言」を上げることができる[19]。前者は、外国人男性が日本人女性をレイプしたという内容、後者はプールに行くと東南アジアの女性から性病を移されるという内容のものであるが、「外国人に注意しろ」「あのプールに行くな」という自己肯定的な当為命題は、外国人に対する差別的言説でもある。今回の場合も、流言がタイ国やタイ人に対する差別として受け取られもした。安易な自己肯定言説は差別につながる、ということは、この事件の残した教訓のひとつであろう。

それにしても、この言説はなぜこれほどまでに広まったのだろうか。この点もちろん、マスメディアが伝えたという点は重要であるが、さらに「米」というテーマの普遍性が影響したことを見逃すことはできない。流言が発生するためには、その言説のテーマに関心を持つ人々が多数存在しなければならないが、この点、日本人の主食である米というテーマは、恰好のものであった。そして、国家の貿易統制に守られてきたために、多くの国民は外国産米に対する不安を共有することができた。このことが大規模な流言の発生を可能にしたと考えられる。

要するに、今回の流言は、国民の外国産米への不安に裏打ちされた大規模な自己肯定型流言であり、人々に行動を促す解決流言であった、とまとめられる。

(2) 信じられた理由

言説が広範に広まるためには、テーマが関心を集めるものであるだけではなく、信じられることが必要である[20]。では、この言説はなぜ多くの人に信じられたのだろうか。

ある言説が信じられるか否かは、3つの観点

から考察することができる[21]。第1は、状況である。すなわち、人は伝達内容について自分の知識（客観的世界）と照合して真理性を検証する。その結果、ありそうなことは事実として理解される。この流言が発生した直前の客観的世界の有様はどうであっただろうか。

まず第1にタイのイメージがけっして良くなかったことが指摘できる。3月19日付『朝日新聞 夕刊』の短評「素粒子」は、「アジアならそんな事もあるさの声あり」と「隣人蔑視」を嘆いたが、カンボジアＰＫＯ、エイズ・売春、そして米問題のテーマのもとに伝えられるタイの情報は、人々に予断をもたらすのに十分であった。第2に、2月中に似た事件が報じられたこと。たとえば「主食用アメリカ米から異臭」[22]「主食用中国米からカビ」[23]等である。第3に日本海側の数県で、米をめぐるパニックが起きたことが報じられたこと[24]。第4に消費者団体によってポスト・ハーベスト農薬の問題が指摘され、安全性が争点化していたこと。第5に、緊急輸入という未経験であわただしい事態から当然連想される検査への不信感。第6に学校給食には国産米を使う一方、一般には国産米の単品販売を禁止したこと[25]。第7に、マス・メディアによる「農政批判」や「タイ米のおいしい食べ方」の報道、また曖昧な報道[26]。これらの措置や報道は、もちろん意図されたわけではないが、人々の外国産米を「食べなければならない事になってしまった」という気持ちを強くさせた。また第8に1968年まで輸入されていた「外米」のあまり芳しくないイメージがあった。そして最後に、現代人が普遍的にもっている食べ物の安全性にたいする一般的な不安を指摘できる。現代人は、様々な食品公害事件の経験から食べ物に対して臆病になっているので、少しの疑念にでも敏感に反応する。こうした状況のなかで「タイ米にネズミが入っていた」という言説は信じられたと考えられる。

2つ目の観点は態度である。これは発話者にむけて誠実性を検証するもので、発話者の主観的世界が問題になる。この点に関して、2点指摘することができるだろう。

まず第1は、写真による説得ということである。写真が真実を隠して来たことは、ナチスやスターリン、最近ではネッシーの例で有名である[27]。しかし、この方法は現在も有効性を失っていない。人々は写真に対して、見たままを誠実に伝えているという信頼を寄せている。その結果、写真に示されたものは信じてしまうのである。今回「発見された」ネズミも多様に編集され流布された。このことは「事実」をより以上に強調することになった[28]。

第2に、ワイドショー効果を指摘したい。一般にニュース番組は、情報の客観的な真理性を重視して伝達するが、ワイドショー番組は、むしろ出演者の主観的な誠実性を重視した伝達をする。両者は説得力の質が違うのである。そして古典的名著『大衆説得』を上げるまでもなく、誠実性は強力な説得効果を発揮する[29]。こうした伝達方法によってもたらされる効果をワイドショー効果と名づければ、今日の日本のニュース番組の多くは、この効果を取り入れようとしているのは明らかだろう。ワイドショーは米騒動をかなりの時間報道した[30]。またワイドショー化したニュース（ニュースショー）番組も同様であった。今回テレビ報道が、誠実性を強調した反面、どれだけ真理性を確保できたのかは疑問である。

第3の観点は、権威である。この観点からは発話者や内容上の発話者（「何々によると」の何々）がもっている社会的正当性が検証される。今回、この点はどうだったのだろうか。

まず、食糧庁長官や農水相の否定が不徹底だったことがあげられる。先に述べたように、両者はネズミ混入を当初認めるかのような発言をし、その後それを否定している。第2に、販売方法や学校給食への導入をめぐって政府方針が二転三転したことがある[31]。そして第3に、人々のあいだに政治家不信があったことが指摘できよう。2月上旬には国民福祉税騒動があり、下旬には内閣改造問題が起きた。さらに、米騒動のさなかに前建設相が逮捕された。

こうした騒動や事件の結果生まれた政治家への不信感のうえに前述の混乱が加わり、人々は権力者の言うことは当てにならないという心証をもっていた。しかし他方で、ネズミ混入が国会で問題になったということは、それはそれとして情報の信憑性を高めることになった。こう

した権威の揺らぎの中で、この流言は多くの人に信じられたと考えられる。

要言すれば、状況、態度、権威の3点のすべてにおいて、この言説を信じるための条件はそろっていたと言って良い。

(3) ザムザの恐怖

この流言をこれまでとは別の角度から考えてみたい。筆者がここで注目したいのは、なぜ「ネズミ」だったのかという問題である。

実は、近年ネズミをめぐる流言は、このほかにも幾つか起きている。たとえば、1992年、神奈川県相模原市ではスナック菓子からネズミが出て来たという話が広まったし[32]、ケンタッキー・フライドラットの話は、日米共通の噂である[33]。また、「ビルの屋上にある貯水槽にはネズミの死骸が浮かんでいる」という言説は良く聞く話である[34]。これらに共通するのは、いずれもネズミを食べる恐怖を語っている点であろう。

民俗学的に言えば、ネズミのように夜行性でかつ人間社会の身近な闇に棲む動物は、話の中で異界との橋渡し役として人気のあるキャラクターである。実際日本のフォークロアには、ネズミに限らず、こうした動物、たとえばタヌキ、キツネ、イヌ、ネコ、ヘビ、などの超能力を語ったものが多い。では今回の流言も、こうした伝統的フォークロアの延長上に理解すべきなのだろうか。

そこで筆者は、できる限り日本の伝統的フォークロアを調べた。しかし「ネズミを食べる」という近年はやりの話に類似するものは出てこなかった。むしろ、たとえば「鼠浄土」、いわゆる「おむすびころりん」で語られるネズミとネズミを食べるという現代の流言との間には、根本的な違いがあるように感じざるを得なかった。

伝統的なものからこの流言を解釈できないとすれば、現代に固有な条件にその意味を探るしかない。近年の流言研究では民俗学的分析が盛んに行われているが、今回の事件に限れば、むしろ、社会学あるいは社会心理学的な分析が必要だと思われる[35]。では、そうした文脈から、「タイ米ネズミ混入流言」は、どのようにとらえられるだろうか。

伝統的なフォークロアでは、動物たちは「化かす」力、超能力を持った存在として語られることが多い。そこには、自然に対する素朴な畏怖があると言って良いだろう。おそらく、昔の人は、自分達の科学的知識では割り切れない現象に出会ったとき、それをこうした動物たちの力として理解したのではないだろうか。そこに、昔の人の自然や動物に対する「おそれ」と同時に「うやまい」を感じ取るのは容易である。ひるがえって「ネズミを食べる」という言説には、「おそれ」はあるものの「うやまい」を感じることはできない。そこにあるのは、「そんなものを食べるようにはなりたくない」という脱文明化、脱人間化することの恐怖、換言すれば自然への恐怖でしかないように思われる。

かつてカフカは、『変身』のなかで、文明社会から取り残されて汚物を食べる1匹の甲虫になる人間の姿を描いた。現代人は、まさにその主人公、グレゴール＝ザムザのようになることに恐怖しているのではなかろうか。おそらく現代人は、さまざまな文明の利器の中で暮らすことに慣れてしまったので、それらを奪われたとき自分がいかにか弱い存在であるかということを自覚しているのだ。だからこそ、人工的世界に執着する。

人工的世界とは都市的世界のことである。この点で、今回の「タイ米ネズミ混入流言」とオイル・ショックの際のトイレット・ペーパー騒動を結び付けて考えることもできるだろう。かつて人々はトイレット・ペーパーがなくなるという言説に過剰に反応した。トイレット・ペーパーは、まさしく都市的生活の象徴である。だとすれば、これら2つの言説と騒動の背後には、いずれも都市的生活を死守しようとする気持ちが存在していると考えられないだろうか[36]。昔、と言ってもそれほど前ではないが、子供達は、「俵のネズミがコメ食ってチュー」と歌い、遊んだものだ。しかし、もはや多くの現代人＝都市人の生活においては、そうした自然との日常的な触れ合いは希薄である。それゆえこの流言は、高崎議員が述べたように「日本ではとても考えられない」話として広まった。すなわち、「タイ米ネズミ混入流言」は、現代の都市生活が生み出した都市流言の1つであったのではな

いだろうか[37]。

3　流言の伝達

(1)　流言とパーソナル・コミュニケーション

以上述べて来た点以外に「タイ米ネズミ混入流言」が我々に提起した問題について、最後に2つの側面から考察したい。第1はパーソナル・コミュニケーションの側面であり、第2はマス・コミュニケーションの側面である。

まず前者。流言は既存のコミュニケーション・ルートを活性化させる。しかし、それが既存のコミュニケーション・ルートの範囲だけにとどまっていたならば、それは流言ではなくて単なる噂に過ぎない。流言の流言たるところは、通常のコミュニケーション・ルートを越えて広まって行く点にある。流言は噂の氾濫なのである。

今回の流言で第1に興味深いのは、米を求める行列の中でこの言説が語られていたという雑誌報道である[38]。シブタニは群衆状況（milling）が流言発生を促すことを指摘しているが、まさに行列のような不特定の人との直接的コミュニケーションの機会は、流言の発生に好都合である[39]。現代では様々な電子的パーソナル・メディアが発達している。しかし、それらでのコミュニケーションは、先に指摘した言説を信じる3つの観点のうち「態度」の側面で直接コミュニケーションに劣っているし、現段階の普及状況では広がる範囲も限られている。今回の事件は、パーソナル・コミュニケーションにおける、直接コミュニケーションの力の大きさをあらためて示したと言える。

第2に言えることは、この流言は、イン・グループの確認と拡大に役立つとともに、イデオロギーを顕在化させたということである。この流言を語る人々は、国産米を欲している者同士であるという連帯感をもつことができたであろうし、また、流言を語ることによって仲間が増えて行く快感を得ることができたであろう。流言を語ることよる集合的一体感がコミュニケーション行為を後押ししたと考えるのはそれほど無理ではない[40]。この言説は、こうして伝わって行き、平時においては潜在化していた国産米主義とも言うべきイデオロギーを表出させたのである[41]。

(2)　流言とマス・コミュニケーション

次にマス・コミュニケーション、特に新聞報道との関連で、今回の事件を考えてみたい。

今回の情報の流れを図示したのが図2である（図2「タイ米ネズミ混入流言の流れ」参照）。

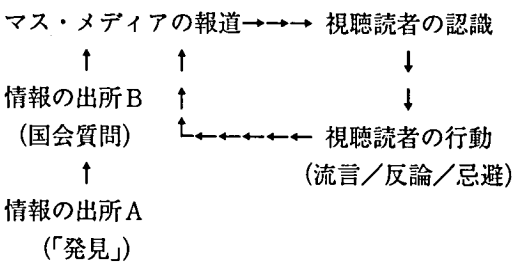

図2　タイ米ネズミ混入流言の流れ

「タイ米ネズミ混入」の報道に関して、三大新聞は際立った違いを見せた。

『毎日新聞』は、3月1日、情報の出所Bを根拠に「タイ米ネズミ混入」を事実として報道した。『読売新聞』は、2日、情報の出所Bをめぐって共産党議員と農水相双方の主張を伝えた。『朝日新聞』は、3日に「異物が混入しているとされる問題」について来日中のタイ国商務省副大臣のコメントを伝え、4日には「ネズミなど異物が見つかったと取り上げられた問題」についてバンコク発共同電として、タイ政府の反応を伝えた。

こうした第一報の違いは、その後の各社のこの問題に関連した記事の報道姿勢にも連動する。すなわち、『毎日新聞』は、関連情報を積極的に記事にしたし、逆に『読売新聞』は概して抑制的であった。『朝日新聞』は、タイ側の反応を重点的に報道した。

これらの報道に関して、いずれの新聞にも言えることは、元々の情報の出所Aを確認していないということである。この点、当初共産党側が誰がネズミを発見したのかを明らかにしなかったことは、考慮されなければならないならない。しかし、だからと言ってどのような報道をしても良いという訳ではあるまい。こういう場

合、メディアはいかに報道すべきなのだろうか。

筆者は、少なくとも『毎日新聞』と『朝日新聞』の報道については、疑問を感じざるを得ない。なぜなら『毎日新聞』は、当初、情報の出所Aを十分確認しないまま議員の発言を事実断定的に報道したと考えられるからであり、『朝日新聞』の報道は、自らの新聞が報道していないことについての外国の反応を伝えることで、結果として自紙の読者に曖昧な情報を与え、不安を煽った可能性があるからである。

マス・メディアが報道することで流言が拡大し、そのこと、あるいはそのことによって引き起こされた事件をまたマス・メディアが取り上げるという相互作用は、近年の都市流言にはよくみられるパターンである。図を使って言えば、情報は右側の環のなかで自己増殖を繰り返す。こうした過程において特徴的なのは、情報のそもそもの出発点が曖昧にされることである。今回の流言においても同様であった。

この点、「事実は何か」という問いかけがメディア側にも、視聴読者側にも希薄だったと言って良いだろう。しかし、責任は視聴読者よりもメディア側に大である。なぜなら、情報量が増大し、メディア依存が高まっている今日の社会では、視聴読者に批判的態度を要求するにもおのずと限度があるからである。マス・メディアに携わる人には、冷静に事実を追及する、より一層のジャーナリズム精神が求められていると言える。今回の流言事件は、この点でも学ぶべき素材を提供したと考えられる[42]。

4 結び

最後に本論文の要点をまとめることにしよう。

①流言の発生条件について。タイ米にネズミが本当に入っていたのかどうかは定かではない。しかし、この曖昧な情報は急速に全国的に広まった。その理由は、テーマとしての米が普遍的なものであり、共有される不安があったことのほかに、その言説を真実と受けとめやすい3つの条件（客観的世界、主観的世界、社会的世界）が備わっていたからである。

②都市との関連について。この流言は、人々が都市生活で抱かざるを得ない不安から発生したと考えることができる。この点で、この流言は、オイル・ショック時のトイレット・ペーパー騒動と通底している。すなわち、現代都市社会が生み出した都市流言であったと考えられる。

③流言の潜在的機能について。電子メディアが発達した現代社会においても、直接的なコミュニケーションは健在である。流言は、メディアの介在の有無を問わず、既存のコミュニケーション・ルートを活性化させたり、新たなコミュニケーション・ルートを開拓したりする。ただし、それは開かれたネットワーキングではない。流言は、イン・グループの確認と拡大に貢献するとともに、そのことを通してイデオロギーを表出させる潜在的機能をもっている。

④ジャーナリズムとの関連について。情報が伝達される過程で、当初マス・メディアのなかに「事実は何か」という問いよりも、センセーショナリズムや視聴読者の不安を煽る報道傾向があった。こうしたジャーナリズムの姿勢によって、流言は増幅することになった。

注

(1) こうした噂をテーマにした本は、木下富雄「現代の噂から口頭伝承の発生メカニズムを探る～「マクドナルド・ハンバーガー」と「口裂け女」の噂」（木下富雄／吉田民人編『記号と情報の行動科学』福村出版、1994年）で、かなり紹介されているが、それ以後も池田加代子他『ピアスの白い糸』（白水社、1994年）等、多数出版されている。しかし、紙幅の関係上ここでそれらを紹介するのは割愛させていただく。電子的パーソナル・メディアのメディア特性については、本稿第3章第1節で簡単に触れた。

(2) 『朝日新聞』1987年7月1日。『読売新聞』1989年、6月26日。このうち「当たり屋流言」については、筆者も同年9月に神奈川県川崎市で回覧板や張り紙で伝わったことを確認している。

(3) 拙稿「現代社会における流言」（社会運動論研究会編『社会運動の統合をめざして』成文堂、1990年）、「流言の根底にあるもの」（社会運動論研究会編『社会運動の現代的位相』成文堂、1994年）。

(4) この論文は、いわゆる米騒動と流言との因果関係

を主張するものではない。ただし、この流言がタイ米忌避を招いたという報告は、『朝日新聞 夕刊』（道内版）3月4日、『朝日新聞』3月26日、『毎日新聞』3月18日に見受けられる。

(5) 『参議院決算委員会会議録第1号　平成6年2月28日』

(6) 『週刊現代』3月19日号。

(7) 『FLASH』3月22日号。

(8) 『週刊文春』3月17日号。

(9) 『週刊読売』3月20日号。

(10) 『朝日新聞 夕刊』3月19日。

(11) 『赤旗』3月19日。

(12) 『AERA』3月28日号。

(13) 『AERA』4月11日号。

(14) うわさとニュースの研究会（代表 川上善郎）『平成米騒動～お米とうわさの調査報告書』文教大学情報学部、1994年。

(15) ある言説が真実であるか否かは、すぐ分かる場合もあれば、時間が経っても分からない場合もある。したがって、虚偽性をもって流言を特徴づけるのは適切ではない。この点は、前掲拙稿「現代社会における流言」参照。

(16) 拙稿「流言の根底にあるもの」参照。

(17) もっとも、「不安」の背後に「飽き」を想定することは可能である。それを示唆する資料として、ある主婦は、米を求める人々に悲壮感は感じられず、むしろ情報交換を楽しんでいるようだったと記している。『SAPIO』5月26日号。

(18) 拙稿「流言の根底にあるもの」参照。

(19) 「外国人レイプ流言」については、市川孝一「外国人による婦女暴行デマとその背景」『生活科学研究』文教大学生活科学研究所紀要）第14集、1992年。「プールで性病流言」については、『朝日新聞』1984年9月14日。

(20) 拙稿「現代社会における流言」参照。また、川上善郎はエイズ流言についてこの点を実証的に明らかにしている。川上善郎「エイズとうわさ～うわさへの接触、うわさの伝達を促進する要因について」文教大学情報学部『情報研究』第15号、1994年。

(21) 拙稿「現代社会における流言」参照。

(22) 『朝日新聞』2月19日。

(23) 『朝日新聞』2月26日。

(24) 『朝日新聞』2月19日。

(25) 食糧庁は当初学校給食には国産米を使用するとしていたが、3月17日に市町村の自主判断を認めた。また食糧庁は3月7日に国産米の単品販売を禁止し、ブレンドを奨励したが、11日にセット販売を認めた。

(26) 曖昧な報道については第3章第2節を参照。

(27) 『朝日新聞』3月17日。

(28) たとえば『週刊文春』3月17日号を参照。

(29) R. K. Merton, Mass Persuasion: The Social Psychology of War Bond Drive, 1946（柳井道夫訳『大衆説得』桜楓社、1973年）

(30) ワイドショーが米騒動を放映した時間は、3月6日から12日までが6時間45分15秒で各話題の中で1位。13日から19日までが4時間13分52秒で2位、20日から26日までが3時間7分11秒で2位であった。TBS『ブロード・キャスター』資料。

(31) 注(25)を参照。

(32) 『朝日新聞』（さがみ野版）1992年5月22日。

(33) J. H. Brunvand, The Vanishing Hitchhiker: American Urban Legends and Their Meanings, 1981（大月隆寛、菅谷裕子、重信幸彦訳『消えるヒッチハイカー』新宿書房、1988年）

(34) 重信幸彦「噂的な言葉の力」『週刊読書人』1993年10月29日。

(35) 民俗学的手法を取り入れた流言研究として、前掲木下富雄の論文、また三隅譲二「都市伝説――流言としての理論的考察」（『社会学評論』165、1991年）がある。

(36) 都市生活は自然への恐怖を醸成するばかりではない。一方で自然へのロマン主義的感情も生み出す。現代のアウトドア・レジヤーへの関心の高さは、それを証明するものだろう。しかし、その場合のアウトドアとは、制御された自然でしかないことに留意したい。

(37) 都市がいかにネズミを排除して来たかついては、佐藤健二『風景の生産・風景の解放』講談社選書メチエ、1994年参照。民俗学的研究では、現代の流言を「都市伝説」（Urban Legends）と呼ぶことが多いが、これは不適当なネーミングである。なぜなら伝説は時代を経て言い伝えられるものなのに対して、今日話題になるものの多くは短命だからである。この点は拙稿「流言の根底にあるもの」参照。

(38) 『週刊読売』3月20日号。注（14）参照。

(39) T. Shibutani, Improvised News: A Sociological Study of Rumor, 1966（広井脩、橋元良明、後藤将之訳『流言と社会』東京創元社、1985年）146頁。

(40) 注(17)参照。

(41) シブタニ前掲書、210頁参照。ユングは噂によって無意識のものが意識化されると述べている。C. G. Jung, Moderner Mythus: von Dingen,die am Himmel gesehen werden, 1985（松代洋一訳『空飛ぶ円盤』朝日出版社、1976年）23,4頁。

(42) この点でオイル・ショック時の教訓が活かされたのか疑問である。ある新聞記者はトイレット・ペーパー騒動の後、次のように書いている。「問題は、その後の報道姿勢であろう。あちこちでトイレット・ペーパー・パニックが起き始めた時、自分達の報道が結果的にせよ、パニックをあおり立てていることに気がつかなければウソであった。実態はむしろ逆であった。『異常事態を見たままに、正確に報道する』だけでいいのか。沈静化に向けての報道に主眼を置くべきではなかったのか。報道機関への反省を迫る材料でもあった」松井義雄「経済と情報」（富田信男／加藤博久編『情報と社会変動』北樹出版、1989年）98頁。

付　記

・新聞、雑誌でとくに年を示さなかった場合は、すべて1994年である。

・この論文は1994年6月12日第42回関東社会学会大会において報告したものを加筆修正したものである。